

ID No.	2110
研究課題名	子宮体癌スクリーニングにおける液状化細胞診検体の遺伝子解析研究
研究代表者	齋藤 豪(札幌医科大学産婦人科学講座・教授)
研究組織 受入教員 研究分担者	古川 洋一(東大医科研臨床ゲノム腫瘍学分野・教授) 長谷川 匡(札幌医科大学医学部産婦人科学講座・教授) 杉田 真太郎(札幌医科大学医学部産婦人科学講座・准教授) 岩崎 雅宏(札幌医科大学医学部産婦人科学講座・准教授) 寺本 瑞絵(札幌医科大学医学部産婦人科学講座・講師) 郷久 晴朗(札幌医科大学医学部産婦人科学講座・講師) 松浦 基樹(札幌医科大学医学部産婦人科学講座・講師) 寺田 倫子(札幌医科大学医学部産婦人科学講座・助教) 池上 恒雄(東大医科研臨床ゲノム腫瘍学分野・准教授) 山口 貴世志(東大医科研臨床ゲノム腫瘍学分野・特任講師) 畠山 晴良(東大医科研臨床ゲノム腫瘍学分野・学術支援専門員) 幸保 莉香(東大医科研臨床ゲノム腫瘍学分野・技術補佐員)
研究報告書	<p>2017年9月～2018年4月の期間、インフォームドコンセントにより同意を得られた218例の子宮内膜液状化細胞診検体を採取し、そのうち解析に必要なDNA量が得られ、遺伝子解析で十分なリード数が得られた195例で、Cancer Hotspot Panelによる遺伝子解析を行った。</p> <p>195例の中で34例は子宮体がんと診断された。34例のうち24例は細胞診で陽性・疑陽性とされ、細胞診のみの感度は71%であった。一方遺伝子解析では、これらのがん34症例中27例で病的変異を検出し、感度は79%であった。細胞診で疑陽性以上または遺伝子解析で病的変異陽性であった症例は31例であり、細胞診と遺伝子解析の併用での感度は91%であり感度の上昇が認められた。子宮内膜増殖症10症例では、全例で細胞診陰性であったが、遺伝子解析で7例に病的変異を認めた。子宮内膜ポリープの症例は7例あり、全例で細胞診陰性であったが、遺伝子解析で2例に病的変異を認めた。これらの結果は、液状化細胞診検体の遺伝子解析が、腫瘍性病変の検出感度を向上させることを示唆している。現在これらの結果を論文にまとめている最中である。</p>